

「漁村部落の文化と教育」

大阪大学大学院 西田芳正

「地域社会と教育」に関する研究は教育社会学のなかでももっとも活発に行なわれているものの一つであり、戦後の各時期に課題と対象を変化させつつ調査・研究がなされてきた。その間、方法論に関する議論も多数なされてきたが、戦後の早い段階で比較的多く見られた地域社会と教育に関するケース・スタディは、近年はほとんど見られなくなっている。特に、欧米の研究と比較するとき、人類的な参与観察法を用いた教育研究は皆無に等しい状況と言えよう。子供たちは地域社会とそこに位置する学校の中でどのように生活し、成長していくのか。長期の参与観察をもってはじめて解明しうる面が少なくないと思われる。

■問題の所在

急激な産業化・都市化（過疎化）に伴って地域社会の破壊が進み、地域の人間形成力が失われつつある。同時に、受験競争の激化により学校教育の持つ教育力が低下している。今日の「地域社会と教育」研究は、こうした「教育の荒廃」状況を乗り越える方策として、地域の人間形成力を回復し、学校教育を地域に開かれたものとするを提起している。これらの議論においては、地域と学校の「システム化」「分業化」が目指されるのだが、そこには「地域の形成力」と「学校の教育力」が相互に矛盾なく結合しうる事が前提とされていると言えよう。しかし、両者を無矛盾なものとして捉えてよいであろうか。近代公教育は地域に土着の文化を抑圧する形で成立・浸透したことが指摘されている。また、今日の低学力や「荒れ」の問題も、地域破壊や

受験競争の帰結と言えると同時に、「学校の教育力」とは異質なスタイルの人間形成が地域でなされていること、両者の矛盾の現われと見ることができる側面もあるのではないだろうか。地域に受け継がれてきた人間形成のスタイルと学校教育がどのように関係し、両者のダイナミズムの中で子供たちがどのように成長していくのかを地域の文脈の中で明らかにしていくことが、「地域社会と教育」における重要な課題の一つである。

■調査の概要

今回の調査は、高知県の海岸部に位置する小漁村に8ヶ月にわたって滞在することでなされた。対象となった地域は、漁業を主産業とする被差別部落である。低学力・高校進学上の問題を抱えた地域であり、同時に、被差別という事情によって地域の伝統的文化が明確に残存し、子供たちに受け継がれているという特徴をもっている。この地域文化が低学力等の問題とどのように関係しているのかを解明することが調査の主要な課題である。調査は87年5月から1年の予定であったが、調査対象である中学生の一部との関係がなかなかうまく行かず、断続的なものとなった。そのため、今春中学を卒業した子供たちの一部および幾人かの親とようやくラポールがとれたという、参与観察としては第一段階にとどまっており、現在も継続的に訪問し調査を続けている。

以下、調査地の概要を記し、詳細は発表時に報告する。

■調査地のプロフィール

高知県海洋町平野（仮名）、人口約2500人。そのうち、対象とした地域は南町（仮名）と呼ばれる被差別地区であり、約1000人が海岸部の狭い地域に集住している。

◎就業構造（昭和56年、文化会館調べ）

区分	人員	
	自営	雇われ
林業	0	0
漁業	36	124
建設業	12	3
製造業	1	2
商業	8	0
運輸通信業	13	5
サービス業	6	3
会社員	0	58
衛生	2	1
農業	0	0
日雇い		39
失対		13
公務員		16
合計	342	

平野の主産業である林業・農業から地区住民が排除され、逆に漁業は地区住民のみが従事している。また、ダンプ・トラック運転手や日雇い・失対に従事する者も多く、第1次・2次産業従事者は南町全体の87%を占める。

◎教育達成

○学力状況

地区内外の生徒の成績差は明確であり、学年が上がるにしたがって地区生徒の学力の落ち込みがはげしくなる。この傾向は中学にはいつてさらに明確化し、地区生徒の中にはまったく勉強を捨てしまうものもいく人かでてくる。

○高校進学状況

年度	高校進学率（定時制を含む）	
	地区	地区外
昭和41	11%	
42	12	
51	86	92%
52	72	63
61	60	100
62	93	100

昭和40年代に地域改善対策事業が進められることで地区生徒の高校進学は飛躍的に増加し

たが、6～8割で推移し、地区外との差はいぜんとして残っている。進学先も底辺高校に集中する傾向にあり、中退する率も高い。今春進学したもののうち既に3名が中途退学・休学しており、彼らは中卒のものと同じく大阪と平野を行き来しつつ職を転々とする半失業状態を続けることになる。

◎男らしさの文化

上記のように、地区の学校教育は深刻な問題を抱えているのだが、その背景として地域の伝統的な文化が大きな意味を持っている。肉体労働従事者が多いため、男らしさを強調する文化が優勢である。ある漁師の言葉を引いておく。「オマエらは頭はええんやろうけん、ワシらは身体で覚える。頭で考えとったら遅いんよ。沖に出とって「キミキミ風が出てきましたね、どうしましょう」じゃあ舟が転覆してしまう。「コラッ、何々せんかつ！」いう悪い言葉になってしまうんは当然やな。」

「男は右の肩ではものを持たんのよ。左で軽う持てるところを見せんといかん。ここの男は意地と見栄で生きとるんよ。」この言葉に明確に見いだせる「男らしさの文化」は、地域の産業構造に基盤を持ち、さらに差別によって地区外との接触が限られるという事情から子供たちに明確な形で伝達されている。この地域文化が学校からののはたらきかけと軋轢を生じさせている点に、先に記した地区の教育が抱える問題の源泉を見いだせると考えられる。